

1 読書指導

ねらい

- ・読書意欲を高め、読書の習慣化を図る
- ・低学年（1～3年）では本の世界の楽しさおもしろさにふれ、高学年（4～6年）からは自分を豊かにする読書指導の工夫を図る
- ・緑野文庫を活用して読書の質を向上させる

ねらいについて

現在、本校の児童は読書に抵抗感がなく読書好きの子どもが多い。6年になると読書が定着し、友達同士影響し合い1冊の本をお互いに予約し合う姿が見られる。中学年、高学年でもボランティアの読み聞かせに集中している姿が見られるが、これは低学年からの積み上げや、学年の発達段階や学習に合わせた選書などがなされるなどボランティアの質が高いことによる。また担任が紹介したり読んであげたりなど情報を与えた本は読もうとする。しかし、読書力にはまだ差があり、読んでもらうことは好きであるが、借りても自分からは読まない未読児童がいることも事実である。

この4年間私たちは言葉を豊かにし、学習の土台をつくる読書指導に力を注いできた。

課題解決のためには「資料を活用する力」や「考える力」が求められる。これらの力を伸ばすためには、その土台となる「読書の力」を育てることが必要である。読書の力も学力のひとつとらえていきたい。

一方、私たちの目の前には家庭の様々なひずみや生きづらさを抱えている子ども、人間関係のもつれに悩み、気づかいの中で生きる子ども、自分を客観視する力をなかなか育てられない子どもなど様々な子どもたちがいる。子どもたちにとって読書はどんな意味をもつのだろうか。ある子は、絵本や文学の追体験を通し、今まで言葉にならなかった自分の心の有り様がはっきりし、そのことにより周りの人間関係や自己の気持ちが見つめられるようになるだろう。ある子は、読書を通して様々な価値観に出会い自分のものの見方や考え方が豊かになったりするだろう。1冊の本によって自分が癒されたり救われたりすることもある。読書は子どもたちの生き方を励ますものといえる。さらに読書は内言を育て自己内対話の力と共に子どもたちの内面を育てる可能性をもっている。私たちは読書がもつこれらの世界を子どもたちに手わたしていかなければならない。

しかし、これら読書の力は自然には育たず、常に子どもたちにはたらきかけてこそ育つものである。そのためには以下のような取り組みを意識的に行う必要がある。

(1)連続した読書時間の設定

- ・「図書の日」に限らず日常的に読書活動を行い、読書の連続性を図る工夫をする。
「十分間読書」「朝の読書」「すき間読書」など読みかけの本をいつも手元に置かせ継続的に読む時間を保障する。
- ・読書の幅を広げるための指導の工夫を図る。
チャレンジ読書、お試し読書など、時間やページを限ってともかく手に取り読ませる試みも時には必要である。

(2)本の世界の楽しさにふれ読書に対する意欲や関心を高める指導

- ・担任、学校司書、ボランティアによる読み聞かせやブックトークを日常的に行う。

(3)いろいろな生き方や考え方、知らない世界に触れ自己形成をする読書をすすめる指導

- ・「10歳の君たちに」のリストの本に目印を貼る。(1/2成人式に向けて)。
- ・高学年はノンフィクションにも読書の幅を広げる。(論理としての言葉の力)
- ・教師による「卒業する君たちへ」を作成し配布。

(4)子ども同士による本との出会いの場の設定

- ・学級内や図書委員による「この本おすすめ」の実施。
- ・「全校読み聞かせ集会」の実施。

(5)発達に応じた読書指導の工夫

【1, 2年生】

耳からお話を聞いて「絵を読む」読み聞かせやストーリーテリングによる形象としての言葉の力を育てる時期ととらえ、絵本や幼年童話、ストーリーテリングの世界をたっぷり楽しめる力を育てる。

【2年生後半から3年生】

児童文学への橋をわたる大切な節目の時期ととらえ、絵本から児童文学への橋渡しのための手だてを工夫し、形象としての言葉の力を育てることを重点的に指導する。そのための手だてとして次のような取り組みをする。

2年生後半からは「長文の読み聞かせ」を行う。幼年文学コーナーを充実させ、個々の児童の読書力に応じ長めの児童文学をすすめる。またこの時期は外国児童文学の入門期でもあり、その点についても意識して指導する。

【4年生から高学年】

外国児童文学に読み慣れる力を育てるために読書のアニメーションなどを取り入れたり、ブックトークを積極的に行ったり「軽めの読書」だけに流されないようにする。論理としての言葉の力を育てるノンフィクションも読めるような指導の工夫をする。

【緑野文庫】

(6)全体の読書の質を向上させるために「緑野文庫」を設置し、完読をすすめる。

低学年でかなりの冊数の絵本を読む子どもたちでも、放っておくと学年が上がるにつれて「軽めな読書」に流れてしまう傾向は否定できない。読書の質を上げていくために、機会がある度に本を勧めているが、全ての児童に対しては十分に働きかけられるとは限らない。そこで子どもたちが本を選ぶ目安となる「緑野文庫」を平成21年2学期から設置した。

狛江市では、6年前に小学生に対しおすすめの読書リスト『本の森』を作成し、2年生以上の児童に配付している。本校でも『本の森』コーナーを設け、リストの本を全て配架している。「緑野文庫」はそれらのリストを学年に分け、それに加え各学年33~34冊を選定したもの。各学年で完読すると、6年間で200冊読むことになる。本年度も、緑野文庫の定着をさらに図る。

緑野文庫は、選書に困っている児童や、軽めの読書に走っている児童にとっては有効である。学年が上がるに連れて骨太の作品はやはり読まれにくく、リストの中でも残っていく傾向が昨年見られた。そのために読書傾向調査を年度末に実施し、児童の実態に即した選定を行う。

チャレンジ読書、お試し読書など、時間やページを限ってともかく読ませる手だてを試みる。低学年からの積み上げを大切にし、5~6年後を見通して取り組み、変容を明らかにする。緑野文庫については速読ではなく、読み味わう力を育てるために、低学年では読書クイズを作成し読後にやらせる。読書の在り方の指導を低学年で行うことで高学年につなげられるのではないかと考える。